群馬県みなかみ町旧新治村における
「たくみの里」の発展と地域観光への貢献

Development of *Takumi-no-Sato* and its Contribution to Regional Tourism in Niihari-mura (Minakami-machi for the present), Gunma Prefecture of Tokyo Metropolitan Periphery

菊地俊夫*・岡野祐弥**・北島彩子**・窪村麻里子**・小池拓矢**・
Toshio Kikuchi　Yuya Okano　Ayako Kitajima　Mariko Kubomura　Takuya Koike
園田健太朗**・中村聡美**・真栄田　晃**・鈴木晃志郎***
Kentarou Sonoda　Satomi Nakamura　Akira Maeda　Koshiro Suzuki

摘　要

本報告は，新治村（現在のみなかみ町）における農村観光の拠点である「たくみの里」の現状を実証的に明らかにし，「たくみの里」が地域観光に果たす役割と課題について検討することを目的とした。「たくみの里」の来訪者は 2010 年現在で年間約 45 万人を数え，その観光振興は「たくみの家」と地域住民を主体とする内発的なものであった。このように，内発的な観光振興にこだわったことが成功の最大要因であった。内発的な観光振興は「たくみの家」と地域住民のノウハウやアイディアを用いて地域資源を有効活用することであり，そのための社会組織が構築されることである。いわば，「たくみの里」は「たくみの家」と地域住民のアイディアによる地域資源の活用と，それを持続させる社会組織の構築によって建設され発展してきた。「たくみの里」における今後の観光振興の課題は，点的な観光拠点としての発展でなく，面的な地域観光の結節点となるための仕掛けを構築することである。

I. はじめに

首都圏から群馬県を縦断する国道 17 号線は, 江戸と越後を結んだかつての三国街道に沿う形で，新潟県へと伸びている。17 号線沿いの新潟県との県境には，標高 1,636m の三国山を主峰とする谷川連峰三国連山が, 二県を分断する形で聳えている。かつて群馬から新潟へ抜ける交通の要所であったことから，三国峠を挟んだ両裾には宿場町が形成された。それらの宿場町の 1 つに須川宿がある。本研究の対象である「たくみの里」は，都市農村交流による地域振興を意図した自治体の主導により, 旧須川宿（現在の利根郡みなかみ町須川）およびその周辺の古民家を修景・改築して作られた町並み保全地区の総称である。「たくみの里」が展開する。

*首都大学東京大学都市環境科学研究科観光科学域
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1（9 号館）
e-mail　kikuchan@tmu.ac.jp
**首都大学東京都市環境学部自然・文化ツーリズムコース
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1（9 号館）
***富山大学人文学部地理学教室
〒930-8555 富山市五福 3190 番地

新治村（現在は合併してみなかみ町）は，山間傾斜地が多くを占め，江戸時代以降，養蚕と米作で栄えた。しかし，高度成長期以降は，1970 年に 1,065 ha あった耕地面積が, 2000 年には 571 ha にまで減少するなど，新治村は農家の兼業化や農業生産所得減少に悩まされてきた。農業の衰退にともなって，新治村では 1960 年の人口 1 万をピークに，長期的な過疎化・高齢化が進んだ（原澤 1994，新井 2005）。このような状況を打開するため，村は 1980 年代以降，高付加価値農業や都市農村交流を軸とする地域振興策を進めてきた。特に，都市農村交流による地域振興策の 1 つとして，1985（昭和 60）年に「たくみの里」が開設された。本研究は「たくみの里」の建設から四半世紀を経た 2010 年現在の状況を現地調査によって実証的に明らかにし,「たくみの里」が地域観光に果たす役割と課題について検討することを目的とした。

「たくみの里」に関する研究は,「たくみの里」が住民主導の観光振興の成功事例として注目されたことも手伝って，1990 年代初頭から 10 年間を中心に多く蓄

積されてきた。それらの研究は，地元自治体の関係者による成果報告や，地理学や観光学の視点から都市農村交流に注目したもの，および工学系の研究者などによる調査報告の 3 つに分類できる。地元自治体の関係者による成果報告としては，新治村産業経済課長だった栗原（1990）による報告をはじめ，企画観光課に在籍した原澤（1994），当時町長として 3 期目を終えるところだった鈴木（1999）ら地域おこし運動を牽引してきた行政担当者自身の記述が残されている。一連の地域おこし運動が，当事者によって公務員向けの一般誌や学会誌などで紹介されることにより，新治村の試みが広く知られるようになった。これらは，活動の沿革を簡単に把握するのには有効であり，当事者が住民主導の地域おこしの成功例として，そのプロセスと成功を説明する体裁となっていた。

地理学や観光学から「たくみの里」を取りあげた研究には，溝尾（1996，2007）があり，「たくみの里」の試みが軌道に乗るまでの経緯を地域の事象とともに総合的に紹介し，成功事例を踏まえて今後同様の試みをする自治体関係者に助言を送るものになっている。一方，新井（2005）は，コミュニティビジネスの考え方を援用し，「たくみの里」の運営実態を解釈しようとしたが，その分析の中心は新治村が進めてきた地域振興の沿革であった。一般に，「たくみの里」に関する研究はその沿革や成功までのプロセスを中心に記述・分析されてきた。それらに対して，独自の社会調査で得られたオリジナルデータを用いて，「たくみの里」を含む新治村の地域おこし全般について，多面的に評価しようとする研究もある。

例えば，黒岩ほか（1997）は「たくみの里」の職人と地元住民へのアンケート調査を分析し，観光振興（適正収容力や施設整備，および観光化への問題点）に対する当事者らの評価に注目した。また，千賀（2001）は，「たくみの里」の宿泊客を対象に満足した資源をアンケート調査し，来訪者の地域に対する評価を分析した。類似の調査研究として，中島ほか（2001）は村内を「たくみの里」，フルーツ公園，農村交流公園ゾーンの 3 つに区分し，事業当初からの事情を知る周辺住民へのアンケートにより，都市農村交流事業の評価を分析した。これらの研究は，第三者的な視点から独自の地域調査を行い，より客観的に「たくみの里」を含む新治村の地域振興を評価しようとするものであった。

以上の従来の研究を踏まえ本研究では，「たくみの里」における地域調査（土地利用調査や聞き取り調査，およびアンケート調査）に基づいて，「たくみの里」の実態を把握するとともに，地域振興や観光化に果たしてきた役割を以下の章で総合的に検討する。

Ⅱ．群馬県における観光動向とみなかみ町の観光における「たくみの里」の位置づけ

2.1　群馬県の観光動向

群馬県は首都圏における都市住民の観光空間や余暇空間として重要な地域で，温泉や渓谷美，あるいは山岳景観などが重要な観光要素になっていた。群馬県が首都圏の観光空間や余暇空間として決定づけられたのは，上越新幹線と関越自動車道路が 1985 年に開通し，大都市への近接性が高まったためであった。加えて，1988 年には全国で 7 番目のリゾート法の適用として，ぐんまフレッシュ高原リゾート構想が実施された。これは，週末滞在型や滞在型の保養地を目標にした観光空間を構築するもので，ルーラルツーリズムなど地域の内発的な観光化を視野に入れたものであった。

1990 年代前半における群馬県の観光地を入込客数の大小とその増減（1985 年から 1991 年）でみると（図 1），入込客数の急増型と減少型，および漸増型に分類できる。減少型では草津温泉や水上温泉のように，従来では入込観光客の 3 分の 2 以上が宿泊滞在していたが，宿泊客の減少が入込客数の増減に反映されていた。漸増型では榛名山や伊香保温泉，あるいは浅間高原のように，宿泊滞在客は入込客の 3 分の 1 以下と伸び悩んでいたが，通過のために立ち寄る観光客が増加している。一方，急増型の観光地は川場村や老神温泉のように滞在型と通過型の性格をもち，それらの入込客数は関越自動車道路や新幹線の整備とともに増加する傾向にあった。

このように，群馬県の伝統的な観光地は滞在型の温泉地を中心としていたが，都心への近接性が交通インフラストラクチャーの整備によって高まるにつれて，滞在型の観光地の入込客は減少ないし停滞するようになった。それに対して，通過型の観光地，および滞在型と通過型の両方の性格をもつ中間型の観光地が発展し，それらのタイプに滞在型から変化する観光地などもあり，群馬県における観光地の性格や地域構造は大きく変化する傾向にある。特に，このような観光地の性格や構造の変化に関連して，群馬県の伝統的な観光地である滞在型観光地は入込客数を減少させる傾向にあり，その対策が 1990 年代後半からの観光施策として重要な課題となってきた。

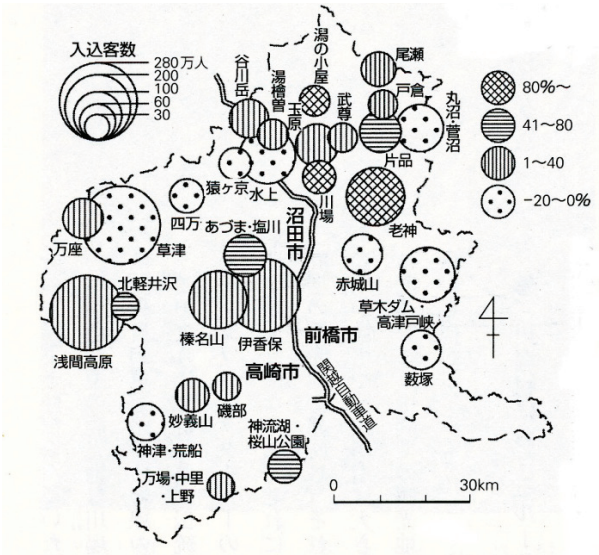

図1　1990年代前半における群馬県の観光地における入込客数とその増減率（1991-1995年）

（群馬県観光統計により作成）

群馬県における1999（平成11）年以降の観光入込客を図 2 にまとめた。それによれば，観光入込客数は6,000万人から6,600万人と大きな増減はないが，2001年に一時的に急増している。これは，群馬県観光局によれば，自動車交通網の発達とともにフラワーパークやふれあいスポーツプラザなどのレジャー施設が整備されたためである。しかし，レジャー施設の整備は一時的に観光入込客を増やしたが，持続的に観光客を呼び込む要素となることは少なく，2001年以降の群馬県における観光入込客数は停滞ないし漸減の傾向を強くしている。そのため，群馬県は観光入込客を増やすため，自然的な観光資源と文化的な観光資源を組み合わせた商品の開発や，観光資本と共同でのイベント開催など，さまざまな観光促進策を企画している。

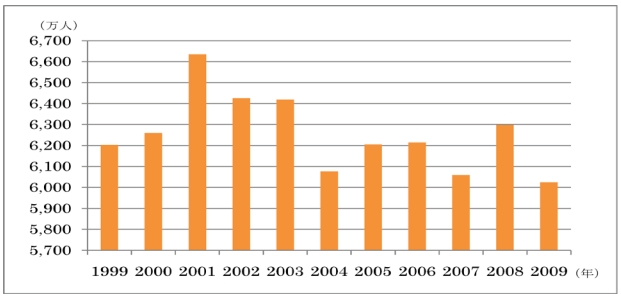

図2　群馬県における観光入込客数の推移

（群馬県統計情報提供システム http://toukei.pref.gunma.jp/
最終アクセス日：2010年10月20日より作成）

例えば，2011年7月1日から9月30日には，東日本旅客鉄道株式会社との共同で，ディスティネーションキャンペーンが実施されることになっている。ディスティネーションキャンペーンは，JRグループ6社と，指定された自治体，地元の観光事業者などが共同で実施する大規模な観光キャンペーンで，このキャンペーンが群馬県で実施されるのは1985年以来2回目のことである。群馬県ディスティネーションキャンペーンのテーマは「心にググっとぐんま　わくわく 体験 新発見」であり，温泉や豊かな自然，および新鮮でおいしい農産物を満喫してもらうとともに，農産物の収穫体験やそば打ち体験などをしてもらうことを目的としている。みなかみ町の「たくみの里」もこのキャンペーンに参加することになっており，より一層の観光客誘致が期待されている。

他方，群馬県は都市農村交流と農山村の地域振興の中核にグリーンツーリズム（ルーラルツーリズム）を位置づけており，農山村地域においてと自然・文化・人々との交流を楽しむための滞在型の余暇活動としてグリーンツーリズムを推進している。グリーンツーリズムのフィールドは，農山村地域が中心となるが，農山村地域のみならず，都市部においても，優れた自然を有する地域，歴史や伝統・文化などを大切に継承している地域などにおいても，グリーンツーリズムの取り組みは可能であるため，群馬県全体での実施が期待されている。みなかみ町の「たくみの里」も，群馬県の地域観光を推進する新たなグリーンツーリズムの形態として期待されている。

2.2　みなかみ町の観光動向

群馬県利根郡新治村は，2005年10月に隣接する水上町・月夜野町と合併して「みなかみ町」となった。ここでは，合併する以前の新治村の観光動向を踏まえて地域観光の概要について説明をする（写真1）。

新治村は，鉄道の開通によって東京への近接が高まったことから，大正期以降，温泉地として賑わうようになった。第2次世界大戦戦後，新治村は三国トンネル開通とモータリゼーションの到来を契機にして，国道17号沿線という立地条件を活かして，温泉宿泊の観光地としての地位を確かなものにしてきた。特に，猿ヶ京温泉は苗場スキー場と結びついてスキー客の温泉地への集客を行い，湯治客の少ない仏場の温泉観光を定着させた。しかし，1970年代におけるオイルショックの不況により，国民がガソリンの供給不足から日帰りや宿泊の旅行を控えたため，新治村の入込観光客は全体的に減少した。また，猿ヶ京温泉のような歓楽型の温泉地は，全国的に同種なものが多く建設されたこ

とにより競争が激化し，入込観光客数は停滞するようになった。

写真 1　みなかみ町と旧新治村に関する各種の観光パンフレット

（2010 年 7 月　筆者撮影）

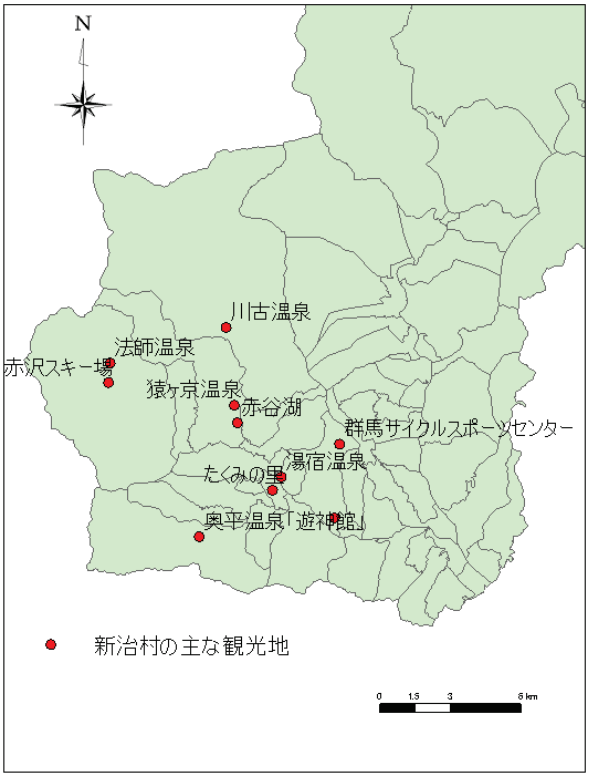

図 3　群馬県新治村における主要な観光資源の分布

（「みなかみ町観光協会公式サイト」より作成）

そのような状況のなかで，1982 年の上越新幹線の開通と，1985 年の関越自動車道の開通は，新治村の観光にとって通過型の観光客が多くなるため，マイナスになるのではないかといった懸念もあった。しかし，新治村の観光にとって新幹線の開業や自動車道路の開通はむしろプラスに作用した。これは，交通の技術革新が東京圏からの観光客の誘致を一層容易にしたためで，身近な地域で観光を楽しむ日帰り客や温泉宿泊客が漸増した。いずれにしても，1980 年代前半までの新治村における観光資源は温泉であり，温泉を中心に地域観光が展開していた（図 3）。

新治村における観光の転機は，基幹産業であった農業が農業経営者の高齢化や後継者不足などから衰退しはじめたことであった。このような農業の衰退は農村の過疎化や高齢化を招き，農山村の再編と活性化を考える契機ともなった。新治村は，三国街道の宿場町として栄えた「須川宿」を中心に，地域に点在する「野仏」などを探しながら田園を散策する「野仏巡り」の農村観光を企画した。さらに，新治村は「須川宿」を整備し，須川宿や周辺農村の古民家を利用して農村生活の体験や手作り体験ができる「たくみの家」を 1985 年から建設しはじめ（写真 2），「たくみの家」を核とする「たくみの里」づくりに着手した。

写真 2　群馬県みなかみ町「たくみの里」

（2010 年 7 月筆者撮影）

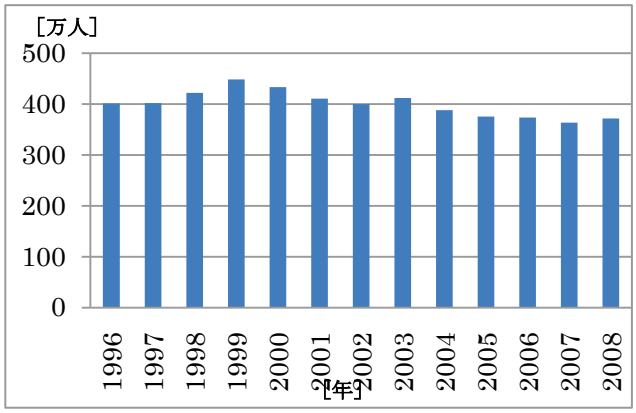

図 4　みなかみ町における観光入込客数の推移

（日本観光協会「全国観光動向」により作成）

注）旧新治村，旧月夜野町，旧水上町の 3 町村が合併する前の値は，この 3 町村の観光客数を合計したものをみなかみ町の観光客数とした。

「たくみの里」による農村観光が軌道にのると，その周辺における観光振興にも力を入れるようになった。例えば，オートキャンプ場や「フルーツ公園」が「たくみの里」の周辺の観光施設として注目を集めている。さらに，「たくみの里」およびその周辺における新たな取り組みとして，観光りんご園の開設や拡張が目立つようになり，「たくみの里」を中心とする農村観光が確かなものになっている。

次に，みなかみ町における観光入込客数の変化を図4 に基づいて検討する。みなかみ町の観光入込客数は図1からもわかるように，1999（平成11）年の約450万人をピークに減少傾向にある。これは，交通の高速化や低廉化によって，みなかみ町が従来の宿泊型から通過型の観光に変化したためであり，みなかみ町が観光の最終目的地でなくなったことを反映している。また，新治村を含む周辺の3町村が合併をした2005年以降は，観光入込客数は約350万人前後で推移し，入込観光客の増減は落ち着いてきてきた。これは，群馬県北部に関連した観光のキャンペーンやイベントの実施，あるいは「たくみの里」のような新たな観光資源の見直しや掘り起こしによって，観光客の減少を抑制してきた結果でもある。さらに，2008年以降は，身近な地域で短期間，安く観光を楽しもうとする観光動向と相まって，観光入込客数は増加する傾向にある。

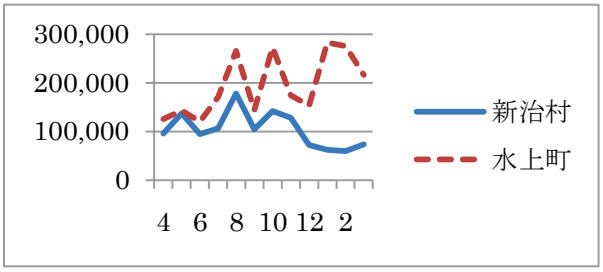

図 5　群馬県水上町と新治村における月別の観光入込数（2000から2004年の平均値）

（日本観光協会「全国観光動向」により作成）

水上町における観光入込客数の季節変動についてみると（図5），かつては田植えが終わった5月と稲刈りが終わった10月に観光入込客数のピークがあり，湯治客中心の観光入込パターンになっていた。しかし，現在の入込観光客数は夏休みと冬季のスキーシーズンに宿泊者のピークがある。つまり，温泉が地域観光の基盤になっていることは当然であるが，冬季のスキーやサイクリング，ゴルフ，そして農村の散策や生活体験を楽しむことができる余暇空間としても機能するようになっている。

しかし，暖冬季における積雪不足とゲレンデ整備の不備などによるスキー客の減少や，長雨による野外活動型の観光（サイクリングや散策など）の不振はみなかみ町の観光に大きな影響を与えることになる。そのため，観光客が利用できる観光メニューを多様化し，天候不順や降水などによる危険分散を図る必要があった。実際，季節や天候に関係なく観光客を集客し，観光客が楽しめる観光資源が重要となり，その意味で「たくみの里」はみなかみ町の地域観光の柱になっている。みなかみ町や新治村に関する観光パンフレットも多様な観光資源を紹介し，観光者の多様なニーズに応えるとともに，自然や市場動向に関する危険分散が図られている。

Ⅲ．「たくみの里」の発展と「たくみの家」の存在形態

3.1　「たくみの里」の経緯と観光動向

新治村における「たくみの里」とは，三国街道の「須川宿」を中心にのどかな農村空間を舞台として，都会からの来訪者と集落の人々とが違和感なく交流し，農村生活の体験やさまざまな手作り体験できるようにした施設（たくみの家）のまとまりである。「たくみの里」は地域住民によって農村景観が維持管理されており，都会からの来訪者が伝統的な農村空間を非日常的な空間として認識し，都会の日常的空間から離れて，心身がリフレッシュできるようになっている。また，「たくみの里」は伝統手工芸と歴史文化，および食文化の伝承とともに，高齢者の生きがい対策も目的にして建設されており，地元にある資源を活かし，地元の人と知恵を活かしてはじめられたものであった。

具体的には，1985年から1987年にかけて地元住民の有志に依頼して，木工と竹細工，および陶芸とわら細工の4棟の「たくみの家」が須川平を構成する4つ集落（須川・笠原・谷地・東峰）に1つずつ建設された。「たくみの里」事業は旧自治省で始まった地域活性化事業を受けたもので，総事業費8億2000万円（うち村の負担は1億5000万円）を投じて「木工の家」，「竹細工の家」，「わら細工の家」の4棟が建設されたほか，資料館トイレや国道が整備される形で発足した（嵯峨1994）。同じ時期には，村営の農産物直売所として「香りの家」も開館し，都市農村交流の拠点として機能するようになった。その後，「たくみの里」事業は第三セクター化され，1993年には財団法人新治農村公園公社

が創設されて事業を引き継いでいる。

「たくみの里」事業で建設された「たくみの家」は農村散策の主要なコースである野仏巡りに沿って点在し，農村散策と組み合わされて農村観光発展の基盤となった。もともと旧新治村の周辺には，かつて信州高遠から多くの石工が移り住んだことから，多くの野仏（仏像や道祖神，庚申塚など）が点在していた。これらを観光資源とし，須川宿周辺の一周約 8.5km のコースを設定して，観光客に散策してもらう試みが野仏巡りであった（写真 3）。野仏巡りはほどなく，年間 30,000 人～35,000 人程度の観光誘客に結びついていた（原澤 1994）。このような野仏巡りの農村観光を基盤にして，「たくみの里」事業が内発的な観光振興として試みられた。しかし，野仏巡りと「たくみの家」を結びつけることの意味が次第に薄れてきている。「たくみの家」が次第に増設されると，それぞれの家の手づくり体験メニューが多様になり，観光者が多く訪れるようになった。

写真 3　みなかみ町「たくみの里」周辺の野仏巡り

（2010 年 7 月筆者撮影）

財団法人新治農村公園公社の資料によれば，「たくみの里」の年間の来訪者数は，1987（昭和 62）年に約 9 万人にすぎなかったが，1993（平成 5）年には 30 万人に達するまでに急増した。その後も年間の来訪者数は増加し，1998 年以降は約 45 万人で増減を繰り返している（2007 年現在の年間の来訪者数は約 44 万人）。来訪者増加の影響で，「たくみの家」だけでなく，飲食店や土産店も増加するようになった（2010 年現在で 13 軒）。「たくみの里」の来訪者を月別にみると，来訪者は 5 月と 8 月，および 10 月と 11 月に多く，2000 年以降では，それぞれの月別の来訪者は 6 万人以上である。それらとは反対に，1 月と 2 月の月別の来訪者数は少なく，2000 年以降では，それらの月別の来訪者は 2 万人を下回っている。「たくみの里」を訪れる客層は老若男女と多様であるが，小学生を中心とした修学旅行生が多い。これは，尾瀬や日光などの校外学習や修学旅行の途中に立ち寄ることが多いためである。

「たくみの家」の建設は地元自治体（行政）が，その維持管理は「たくみの家」に入居した職人が行っている。個々の職人は「たくみの家」で製作の実演と作品の販売を行うとともに，製作の手づくり体験を指導しており，販売や指導に関わる収入はすべて職人のものとなる。2010 年現在は，25 軒の「たくみの家」が須川平地域に点在しており，どの「たくみの家」でも手軽に手づくり体験が楽しめ，職人の技が見学できる。このように「たくみの里」が成功するにともない，農村観光のさらなる規模拡大を図って，新治村は村内全域を対象にした「農村公園構想」を策定し，村づくりを進めた。その一環として，村が 100%出資した新治村農村公園公社を設立した。この公社と「たくみの家」の職人とで「新治たくみの会」を組織し，情報交換やイベント企画を行い，「たくみの里」の農村観光を発展させてきた。2005（平成 17）年には道の駅「たくみの里」が登録され，農村観光の拠点施設としての機能を持つようになった。また，2006 年には NPO 法人「たくみ会」が設立し，「たくみの里」の農村観光が経済的だけでなく，社会的にも充実するようになった。

「たくみの里」における観光資源の 1 つは農村景観であり，それがどのように地域のなかで展開するのかを検討するため，土地利用調査を行い，図 6 の土地利用図にまとめた。これによれば，「たくみの里」は赤谷川の上位段丘面の台地上に立地しているため，水田は少なく，畑地が多く分布していることがわかる。畑地では，トウモロコシ栽培が多く目立っている。トウモロコシの多くは，ピーターコーンなど食味が良く，商品価値が高いもので，道の駅での販売を目的としたものになっている。次に，目立つのはサクランボやブルーベリーなどの果樹栽培であり，それらは隣接して直売所が設けられていることから，直売用でもある。また，果樹園は摘み取り園の形式にもなっており，観光農園や体験農園として機能している。それらに対して，かつて新治村の主要な商品生産であったコンニャク栽培は縮小している。このように，観光客を対象とした農産物の生産や農業経営が中心となっており，観光農業の発展が「たくみの里」の農業景観や農村景観の維持につながっている。実際，コンニャク栽培や大豆栽培が少なからず継続しているのは，手づくりコンニャクの体験やと豆腐づくり体験などにおいて需要がある

ためで，それらの農業も「たくみの里」と大いに関係している。

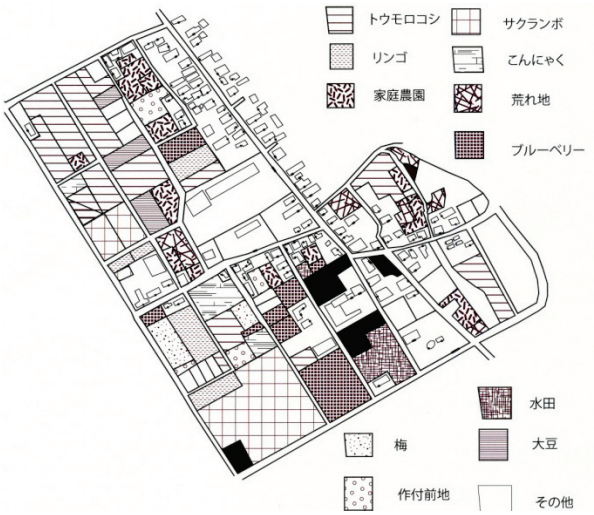

図6　みなかみ町「たくみの里」の中心部（宿場通り）における土地利用（2010年7月）

（現地調査により作成）

宅地利用は幹線道路に沿った短冊状の地割に基づいて行われている。このような短冊状の地割は宿場町の景観を特徴づけるものであるが，間口が狭く奥行きの長い地割は使い勝手が悪く，多くの場合，再分化されたり，統合されたりして，宿場町の景観は薄れていく。須川宿は宿場町の景観が残されており，時代劇の映画撮影にも使われたという（黒澤　明監督の「用心棒」の舞台にもなった）。このような景観を残し，農村観光の資源とするため，新治村は1990（平成2）年には「美しい新治の風景を守り育てる条例」を公布し，歴史的町並みや農村景観の保全を図ってきた。この条例は，かつての養蚕地帯特有の「新治型建築」，すなわち白壁，深茶色の柱，傾斜の緩い屋根で特徴づけられる総二階造りの家並みを保全するものであった（木野勢ほか2004）。また，1994（平成6）年には，「たくみの里」と旧宿場町の永井集落に対して景観ガイドラインが制定され，農村景観や歴史的な景観の保全に努力してきた（小林ほか1995）。その結果，リゾートマンションや農村景観を損ねるような建築はほとんど建てられることなく，観光客が「たくみの里」に期待する農村景観が提供されている。

3.2　「たくみの家」の存在形態

(1)　「たくみの家」の諸類型とそれらの分布

「たくみの里」は2010年現在，25軒の「たくみの家」から構成されている。「たくみの家」すべてで手づくり体験ができ，職人の技が見学できる。食堂と喫茶店などの施設は13軒，JRの宿泊施設も1軒営業している。「たくみの里」は1985（昭和60）年に自治省の

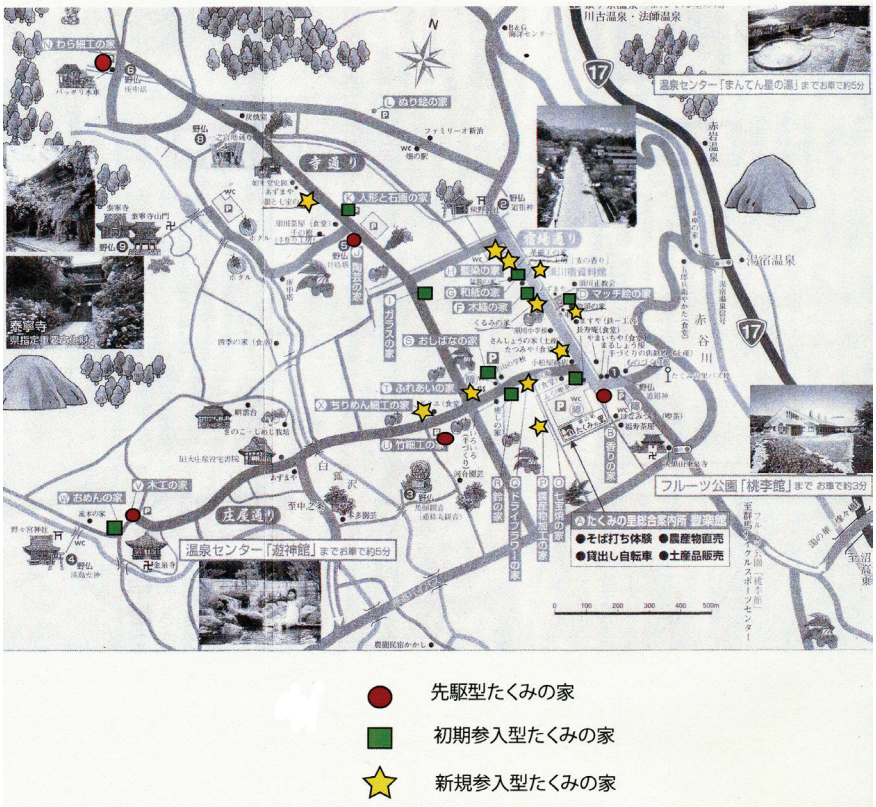

図7　みなかみ町「たくみの里」における「たくみの家」の諸類型とその分布

（現地調査により作成）

地域経済活性化事業の補助を受けて建設が開始された。木工の家，竹細工の家，陶芸の家，わら細工の家，および手づくり郷土の香りの家の 5 軒が 1987 年に「たくみの家」として建てられ，「たくみの里」の歴史がはじまった。これら 5 軒は先駆型のたくみの家として類型化できる。このタイプの「たくみの家」は「たくみの里」建設の初期段階から参加し，「たくみの里」の理念づくりや制度設計，およびイメージづくりや情報発信に関わってきた。特に，陶芸の家の職人は地元に在住し，町おこしや地域おこしに興味をもち，それらに積極的に貢献しようという意欲をもって参加したという。

このように熱意ある先駆型たくみの家に刺激を受けて，1994 年までに 9 軒の「たくみの家」が建設された。これらは初期参入型のたくみの家に類型化でき，和紙の家や石画の家，あるいはガラスの家などがこのタイプに相当する（写真 4）。このタイプの「たくみの家」は「たくみの里」の理念に基づいて建設されており，たくみの職種が重複しないことや分散して立地することなど制約が多かった。しかし，多くの場合，先駆型たくみの家が初期参入型たくみの家をさまざまにサポートし，初期参入型たくみの家は地域に定着することができた。他方，1995 年以降に「たくみの家」を建設し，「たくみの里」の一員になった 11 軒は新規参入型たくみの家として類型化でき，ちりめん細工の家やふれあいの家，あるいはドライフラワーの家などが相当する。これら新規参入型たくみの家は，「たくみの里」の理念や制度が幾分緩和されたため，「たくみの家」を従来の家の分布を考慮しながら自由に建設でき，職種の重複も厳しく制限されることはなくなった。しかし，「たくみの家」の職種の重複は 2010 年現在まで避けられている。

「たくみの家」の分布を示した図 7 によれば，「たくみの家」は須川宿の幹線道路である宿場通り沿って多く立地する傾向にあることがわかる。しかし，先駆型のたくみの家は，もともと野仏めぐりのコースに点在させる意図があったため，須川平地域全体にわたって点在している。特に，先駆型のたくみの家のなかで，わら細工の家や木工の家は宿場通りからかなり離れた場所に立地している。初期参入型のたくみの家も点在する傾向にあるが，新規参入型のたくみの家は宿場通りに集中する傾向にある。このような「たくみの家」の分布パターンは来訪者の偏在性という問題を引き起こしている。

実際，修学旅行や社会科見学，あるいは企業や地域の慰安旅などで多くの団体客が「たくみの里」を訪れる。この場合，来訪者は時間に限りがあるため，総合案内所の豊楽館における駐車場にバスを停め，そこから来訪者は徒歩で移動する。そのため，多くの来訪者は宿場通りとその周辺を中心に散策することになり，宿場通りから離れた「たくみの家」まで足を伸ばすことは少ない。また，自家用車を利用した一般の観光客も駐車場に近い宿場通りの「たくみの家」で満足してしまい，宿場通りから離れた「たくみの家」まで訪ねようとしない。このような現状を解決するため，地域全体を循環するバスが行楽シーズンに運行するようになった。わら細工の家は宿場通りから最も遠く離れて立地しているが，そこまで行くと農村景観が一変する。「たくみの里」のセールスポイントである豊かな田園風景が一望できる（写真 5）。そのような景観をセールスポイントにしながら，「たくみの家」が点在する分布パターンと野仏めぐりの伝統を活かした農村観光が今後の課題となる。

写真 4　みなかみ町「たくみの里」において初期参入型たくみの家に類型化されるガラスの家

（2010 年 7 月筆者撮影）

写真 5　みなかみ町「たくみの里」の山麓部に展開する田園風景

（2010 年 7 月筆者撮影）

(2)　先駆型たくみの家の事例

ここでは，先駆型たくみの家の事例として「陶芸の家」を取り上げる。「たくみの里」事業は 1985（昭和60）年に自治省の地域経済活性化事業の承認を経て開始され，その事業の補助を受けて 5 軒の「たくみの家」が最初に建設された。それらのうちの 1 軒が陶芸の家であり，陶芸の家は 1987（昭和 62）年から営業を始めた。陶芸の家の職人である I 氏は新治村に居住していたが，家族で東京世田谷区の引っ越し，そこで長く生活していた。 I 氏は新治村の農村活性化を目的とした地域密着型の観光施設「たくみの里」が建設されることを聞いて，須川平地域に生家もあり，ふるさとにUターンし農村活性化に役立ちたいという思いから「たくみの里」事業に参加した。I 氏は 26 歳の時から陶芸を始めており，陶芸体験が気軽にできる施設として陶芸の家を建設した。

写真 6　みなかみ町「たくみの家」における陶芸の家
（2010 年 7 月撮影）

陶芸の家は広さ約 54 ㎡の木造平屋建てで，「たくみの里」の中心である宿場通りから離れた寺通り沿いに建設された。これは，「たくみの里」事業の基本的な理念として，「たくみの家」を農村地域に点在させたためである。陶芸の家では，手で粘土の形を整える手びねりの作陶を体験のメニューとしており，1 時間程度の体験で湯飲みや皿などがつくれる。体験料金は 3,000 円（陶土 1kg を含む）で，乾燥と焼き上げは陶芸の家で行い，完成品は 2 か月後に宅配されることになる。作陶は個人で体験する人も多いが，団体で体験する人も多い。特に，修学旅行や課外学習で訪れる小学生と中学生の団体が多く，1 時間程度で手軽に作陶体験できるメニューが短時間でいろいろ体験させようとする学校教育のニーズとうまく適合している。さらに，収容人員が 30 名程度も「たくみの里」にとっては合理的な規模となっている。つまり，1 つの「たくみの家」で団体客すべてを収容するのでなく，さまざまな「たくみの家」が団体客を分担して受けもつことにより，「たくみの里」全体が発展することになる。このことは，「たくみの里」でさまざまな体験をしたいと考える観光者のニーズにも応えることになる。

陶芸の家の職人である I 氏は，「たくみの家」の有志で組織するたくみ会の理事長であり，「たくみの里」事業に最初から関わってきた。それらの関係から，「たくみの里」の建設理念や農村地域への活性化への思い入れは強く，I 氏は「たくみの家」や「たくみの里」全体が潤うことが重要だと考えている。そのため，「たくみの家」の定休日もたくみ会の理事会で協議して，一斉に定休日を設定しないようにし，観光客が「たくみの里」をいつ訪れても，何かしらの「たくみの家」が営業しているように工夫されている。ちなみに，陶芸の家の定休日は金曜日であり，木曜日を定休日とする「たくみの家」が比較的多い。土曜日と日曜日はすべての「たくみの家」が営業している。このように，観光客の利用の視点から「たくみの里」や「たくみの家」全体を考えることも重要になっている。

I 氏の言葉を借りれば，「たくみの里」のセールスポイントは，伝統的な農村景観のなかで観光客と地元住民の触れ合いができることであり，そのようなことから生み出される温かみである。そのため，I 氏は「たくみの里」に自動販売機や ATM といった観光地であればあるべきものをあまり設置しないようにし，伝統的な農村景観を保全し適正利用するような観光地づくりを目指すべきだと主張している。また，I 氏は「たくみの家」の点在性が現在の農村観光の課題としてお

写真 7　みなかみ町「たくみの里」における陶芸の家の I 氏
（2010 年 7 月撮影）

り,「たくみの里」全体を周遊するバスの運行を進めた。ウィークエンドになれば，I 氏自らが周遊バスのガイドを勤めるなどしており,「たくみの里」の地域づくりへの I 氏の貢献は少なくない。

(3)　初期参入型たくみの家の事例

先駆型たくみの家に引き続いて,「たくみの里」建設の比較的早い段階で開設された「たくみの家」の事例として「ふれあいの家」を取り上げる（写真 8)。ふれあいの家は 1994（平成 6）年に開設され，同時に自家栽培の山菜や野菜を使った天ぷらそばなどを提供する食堂の営業も開始した（写真 9)。ふれあいの家は農産物の直売所として機能していたが，次第に農業体験やそば打ち体験（1 時間程度で収容人員は 35 名）が加わり，現在のような農村生活を生産から加工，消費まで総合的に体験できる施設となった。特に，農業体験は食育と結びつき，ジャガイモの植え付け（4 月上旬）

写真 8　みなかみ町「たくみの里」のふれあいの家

（2010 年 7 月　筆者撮影）

写真 9　みなかみ町「たくみの里」のふれあいの家で提供されるスローフードとしてのソバ食

（2010 年 7 月撮影）

や田植え (5 月上旬)，トウモロコシの収穫 (7 月下旬)，稲刈り (9 月下旬) などのメニューが用意されており，修学旅行や課外学習などの学校教育と結びついた利用が多い。

ふれあいの家は，もともと地域の農家であり，養蚕やコンニャク栽培を行っていた。しかし，繭価の低迷やコンニャク価格の不安定性から，農家はそれらの農地利用を果樹園に転換し,「たくみの里」プロジェクトに参加することになった。その結果，農家はリンゴ園を中心にして，サクランボやブルーベリーなど 8 種類以上の果樹園を所有するようになった。これらの果樹園はふれあいの家の周辺に点在しているが，ふれあいの家から徒歩 10 分以内で到達できる距離にあった。このような分布パターンは収穫物をふれあいの家の直売施設まで運搬する利便性と，収穫体験の利便性を考慮したものになっている。また，果樹園はリンゴ園を中心としており，秋の収穫期の台風被害が懸念されている。そのため，収穫期が異なるリンゴを植栽したり，リンゴ以外の多種類の果樹を植栽したりして，農家は自然災害への危険分散を図っている。このような多品目少量生産の果樹栽培は，果樹の収穫期を長く設定することができ，収穫体験を商品の 1 つとしているふれあいの家にとって有利に作用している。加えて，多品目少量生産の果樹栽培は直売所や収穫体験を利用する観光客の多様なニーズに応えることになり,「たくみの里」の農村観光を支える基盤にもなっている。

写真 10　ふれあいの家のパンフレット

そば打ち体験，農産物の直売などについて紹介されている。

ふれあいの家の利用者は埼玉県・東京都・千葉県・神奈川県から訪れる人が多く，それらの人たちは群馬

県内の人よりも多い。ふれあいの家は「たくみの里」の中心である宿場通りから少し離れた場所に立地しているが，広い駐車場が設けられているため，自家用車を利用する観光客が多い。特に，多い観光客は他の観光地からの帰り道に立ち寄る人たちで，その際に直売上で購入した野菜や果物の味がリピーターを生み出している。ふれあいの家ではリピーターとしての観光客が重要な地位を占めており，利用者の約50%はリピーターだという。実際，苗場のスキー場の帰り道にたまたま立ち寄った人が，夏に家族とともに収穫体験に訪れることも珍しくない。加えて，ふれあいの家はリピーターを増やす努力も行っている。それは，新鮮な野菜や果物を旬の時期に宅配するサービスであり，農産物の宅配サービスによって潜在的なリピーターを確保している。

このように，ふれあいの家は従来の養蚕とコンニャク栽培を中心とする農業から，果樹栽培を中心とする観光農業に転換した。結果的には，観光客に農産物や農業体験などを提供することで，農業が家族経営で維持され，農家収入も安定している。しかし，「たくみの里」全体からみると，地域的な課題も少なくない。大きな課題は，「たくみの家」の職人の高齢化であり，その世代交代をどのように進めるかである。ふれあいの家は農家であるため，後継者は農家経営の安定と充実によって必然的に育成された。しかし，「たくみの家」の職人の後継者を育成することが難しいのが現状である。また，「たくみの里」が滞在型の観光地でないことも大きな問題であり，ふれあいの家は農家民宿を考慮した農村観光を模索している。

(4) 新規参入型たくみの家の事例

新規参入型たくみの家の事例として，ちりめん細工の家を取り上げる。ちりめん細工の家は定年退職を契機にして東京都八王子市から夫婦で移住し，2007年に営業を開始した。この夫婦は2000年頃に「たくみの里」を観光客として訪れ，「たくみの家」の体験を行った。その際，夫婦は「たくみの里」に興味をもつようになり，奥さんの趣味である裁縫を活かした出店を考えるようになった。ちりめん細工の家の建設はたくみ会やみなかみ町観光協会のサポートもあり，円滑に進められ，Ｉターンの移住者は無理なく地域に溶け込むことはできた（ちりめん細工の家は借家の形式）。また，ちりめん細工の家は宿場通りから離れた庄屋通りに立地しているが，色とりどりのちりめんや着物，帯地を使って袋物や小物入れの箱，吊るし飾り，貝雛，根付けなどを制作するため，他の「たくみの家」と差別化が図られており，ここを訪れる観光客は少なくない。

ちりめん細工の家の定休日は水曜日であるが，一般に平日は観光客も少なく静かである。しかし，土曜日と日曜日は観光客が多く訪れに賑やかになる。夫婦とも高齢者であるため，ちりめん細工の体験は10名前後と無理のいない収容人員にしてある。また，体験時間も30分から1時間と他の「たくみの家」の体験時間よりも短くなっている。体験費用も500円から1,000円と比較的廉価である。夫婦がちりめん細工の家を始めたのは，本来，生きがいや生活に充実感を得るためである。現在では，夫婦は観光客とのコミュニケーションや子供相手の体験指導に楽しみをみいだすようになっている。ちりめん細工の材料の買い出しで月に1度，八王子市の自宅に帰るが，「たくみの里」から八王子市の自宅まで関越自動車道路を利用して2時間程度の距離が農村居住を長続きさせている要因にもなっている。つまり，農村居住は快適であるが，都会との適度な距離も保持していたいというＩターン者の心理が，「たくみの里」において新たな「たくみの家」をつくる際に重要になる。

3.2 「たくみの家」の有機的関連性

「たくみの家」は組織としての関連性をもたせるため，NPO法人たくみの会の入会を進めている。たくみ会は「たくみの里」全体における農村観光の促進を目的としており，まとまって案内やパンフレットを製作して観光客に配布し，「たくみの家」の情報を発信している。「たくみの家」が案内やパンフレットに掲載されるためには，定休日や営業時間を厳守しなければならない。特に，定休日以外は平日も常に営業しなければいけないし，観光客の少ない冬季も営業をしなければならない。そのような制約は「たくみの家」の職人にとって窮屈と感じることが多い。そのため，たくみ会は「たくみの家」を有機的に結びつける社会組織として重要であるが，窮屈さから入会しない「たくみの家」もある。

現実には，個々の「たくみの家」だけでは農村観光の振興や地域活性化の取り組みは困難であり，社会組織としての結びつき以外の面での「たくみの家」の有機的な関連性が重要になる。特に，観光資源として「たくみの家」をみると，個々の「たくみの家」が大きな観光資源になることは難しい。そのため，「たくみの家」をいくつか組み合わせることにより，観光資源として大きな役割を担うことになる。「たくみの里」では，同

図 8　たくみの里周遊バスマップ　（「たくみの里」ホームページから引用）

種の「たくみの家」の建設を意図的に避け，「たくみの家」の競合を抑制してきた。そのため，「たくみの家」を観光資源として組み合わせることは容易である。「たくみの家」を組み合わせる場合，「たくみの家」の点在性が大きな問題となる。

「たくみの里」は総合案内所である豊楽館と須川宿の宿場通りを中心に大きく西側に広がっているため，「たくみの里」の中心となる豊楽館から遠い距離にあるわら細工の家やおめんの家に行くためには 1km 以上歩かなければならない。そこで，観光客が遠く離れた「たくみの家」にも行けるように，「たくみの里」に周遊バスを運行させた（写真 11）。周遊バスは 500 円（大人）で一日乗り放題であり，約 30 分に 1 本の間隔で循環している。このバスは「たくみの家」と「たくみの家」とを結ぶ交通手段としてだけではなく，観光資源の有機的な組み合わせにも寄与している。実際，「たくみの里」は 30 分ほどで場所によって景観を大きく変えるため，それらの景観を有機的に結びつける動線としての役割もある。特に，「たくみの里」の全景を見渡すことができる山麓斜面は，観光客が訪れることが少ないが，見るべき「たくみの里」の景観の 1 つである。

「たくみの里」の周遊バスの車体には，マッチ絵の家の職人が描いた風景絵が貼られ，周遊バスが「たくみの家」を結びつける動線であることを象徴している（写真 12）。また，一日乗車券には「たくみの家」でさまざまなサービスが受けられる特典もついており，周遊バスは「たくみの家」の集客向上にも一役買っている。さらに，周遊バスは自家用車で「たくみの里」を訪れた人にも利用を勧めており，「たくみの家」におけるサービスの特典もそのためである。加えて，地元の方々がボランティアでバスガイドを務めており，周遊バスが観光客と地元の人の交流の場にもなっている。このような人と人の交流は，「たくみの里」の事業理念の 1 つでもあり，観光客の心に大きなインパクトを与

写真 11　みなかみ町「たくみの里」における周遊バス
（2010 年 7 月撮影）

写真 12　みなかみ町「たくみの里」における周遊バス
（2010 年 7 月筆者撮影）

え，リピーターとなる誘因ともなる。確かに，周遊バスは自家用車を利用した観光で味わうことのできない魅力を観光客に提供している。しかし現状では，周遊バスの利用者は多いとは言えない。周遊バスの1日乗車券の値段設定や「たくみの家」のサービス特典の充実など，今後に考慮すべき課題は少なくない。

Ⅳ.「たくみの里」の地域観光への貢献

4.1　「たくみの里」に対する観光客の評価

「たくみの里」と観光客の関係を明らかにするため，「たくみの里」の中心に立地する道の駅「たくみの里」で観光客に対してアンケートを行った（サンプル数は35）。アンケートで有意な傾向を示したものは，居住地と「たくみの里」の来訪目的との関係である。「たくみの里」へ寄った理由は何かという質問に対して，「たくみの里」の体験施設に行くため，農産物の購入，土産の購入，食事という答えを直接的な来訪目的と，パッケージツアーでのトイレ休憩，ドライブ中の休憩，仕事中の休憩，その他という答えを間接的な来訪目的との2つに大きく分類し，これらと居住地（群馬県内と群馬県外）とでクロス集計を行った。

表1　みなかみ町「たくみの里」における観光客の居住地と観光目的のクロス表

		目的		
		直接的	間接的	合計
居住地	県内	3	6	9
	県外	23	3	26
合計		26	9	35

（アンケート調査により作成）

結果を示した表1と図9によれば，群馬県内からの来訪者は間接的な来訪目的で，群馬県外からの来訪者は直接的な来訪目的で「たくみの里」に来ていることが明らかになった。　この結果は統計的検定（カイ2乗検定）でも有意（有意水準0.05）であるとされた。したがって，群馬県外からの観光客は「たくみの里」を1つの目的地としているのに対して，群馬県内からの観光客は「たくみの里」を来訪する明確な目的をもっていない，ないしは他の観光地に向かう途中に立ち寄っただけということがわかった。このことは，群馬県内の観光客に対して「たくみの里」を多くアピールしなければならないことを示している。「たくみの里」の来訪者の大部分は群馬県外からの人であることを考慮すると，県内に向けたアピールはより重要になる。また，たまたま立ち寄った観光客が再び訪れるような仕掛けも重要である。例えば，観光客の滞留時間を延ばすため，個々の「たくみの家」のホスピタリティとともに，「たくみの家」の組み合わせや「たくみの里」と周辺観光地との組み合わせが重要になる。

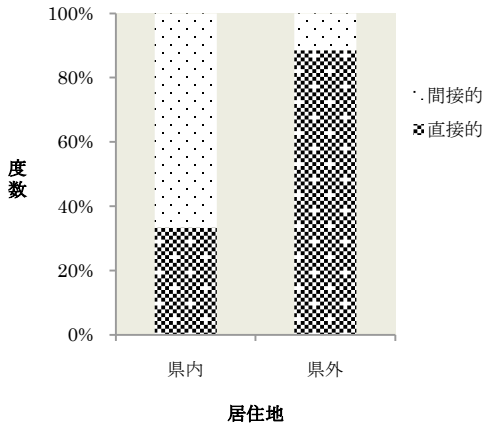

図9　みなかみ町「たくみの里」における観光客の居住地と観光目的との関係（2010年7月）

（アンケート調査により作成）

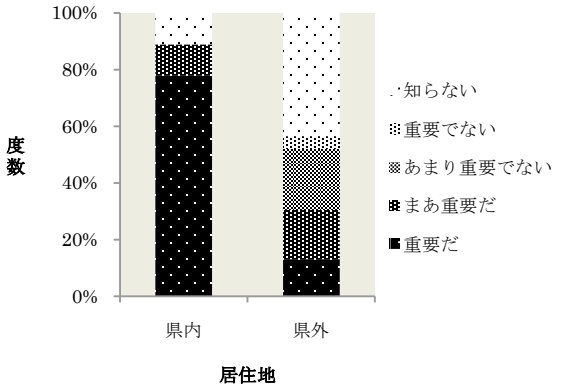

図10　みなかみ町における「たくみの里」と湯宿温泉との関係（2010年7月）

（アンケート調査により作成）

「たくみの里」と近隣の観光地との関連性をどのように評価するかを検討するため，「たくみの里」の来訪者に湯宿温泉をどのようにみるかをアンケートした。その結果は図10に示されている。これによれば，県内からの来訪者は湯宿温泉を「たくみの里」との関連で比較的「重要だ」と回答しているのに対し，県外からの来訪者は湯宿温泉の存在さえ知らないと回答していた。このように，「たくみの里」と湯宿温泉の関連性は

県内と県外との来訪者に顕著な認識の差があるといえる。県内の来訪者は「たくみの里」を1つの観光地と認識するのでなく，県北部の観光地の，あるいは水上地域の観光地の1つとして認識していることがわかる。そのため，県内の来訪者は「たくみの里」をさまざまな観光地の1つとして，ついでに立ち寄る傾向が強くなる。一方，県外からの来訪者は群馬県北部の観光地の1つの目的地として立ち寄る傾向が強い。したがって，「たくみの里」の今後の観光発展のためには，周辺観光地との連携が必要であり，その連携において中核を担う観光地になることが必要である。

最後に，「たくみの里」の来訪者の目的をアンケートの結果に基づいて図11にまとめた。これによれば，来訪目的では個人旅行（家族・友人などとの旅行も含む）が圧倒的に多く，社会科見学（修学旅行を含む）や社員旅行という回答が比較的少ないことがわかる。「たくみの家」で行なった聞き取り調査では，「たくみの里」の来訪者は修学旅行や社会科見学が大きな割合を占めていることだった。この認識の差異は重要である。確かに，「たくみの家」の利用者は修学旅行や社会科見学の一環として手づくり体験を楽しむかもしれないが，「たくみの里」の来訪者の多くは手づくり体験を楽しむことなく，農村散策や宿場散策，あるいは農産物の直売を楽しむかもしれない。つまり，「たくみの家」の潜在的な利用者がまだ多く存在しており，個人旅行者を「たくみの家」に誘う工夫が必要になる。そのためにも，「たくみの家」の有機的関連性は重要になる。

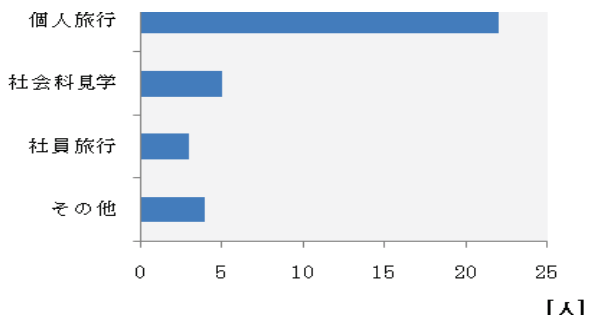

図 11　みなかみ町「たくみの里」における来訪者の目的（2010年7月）

（アンケート調査により作成）

4.2　交通条件からみた地域との関連性

ここでは，「たくみの里」への公共交通機関によるアクセスの現状を通じて，観光の促進のためにはどのような対策が必要なのかを考察する。「たくみの里」にアクセスする場合，鉄道の最寄駅は上越新幹線の上毛高原駅，あるいは上越線の後閑駅になる。上野駅から上毛高原駅，および後閑駅までの所要時間と料金を表2に示した。また，図12は新幹線と特急水上号，および普通列車のそれぞれにおいて，利用者便益の分析を行ったものである（縦軸は一般化費用，横軸は時間価値）。図12によれば，時間価値が1,600円を境にして，それ以下であれば普通列車が，それ以上ならば新幹線が，効用が大きくなること示している。したがって，「たくみの里」への公共交通を利用した観光は新幹線の利用が有利であるといえる。一方，在来線の特急（特急水上号）は時間価値の如何によらず，他の交通機関と比較して一般化費用に優位性がないこともわかる。在来線の特急が，後閑駅までのアクセスとして利用価値を見いだすためには，運転期間の変更と所要時間・料金以外の差別化が必要となる。

表 2　「たくみの里」にアクセスするための鉄道の時間と運賃の比較

	所要時間（最速）	料金（自由席利用）
新幹線	1時間10分	5,040円
在来線特急	2時間10分	3,820円
普通列車	2時間44分	2,520円

（全国版コンパス時刻表により作成）

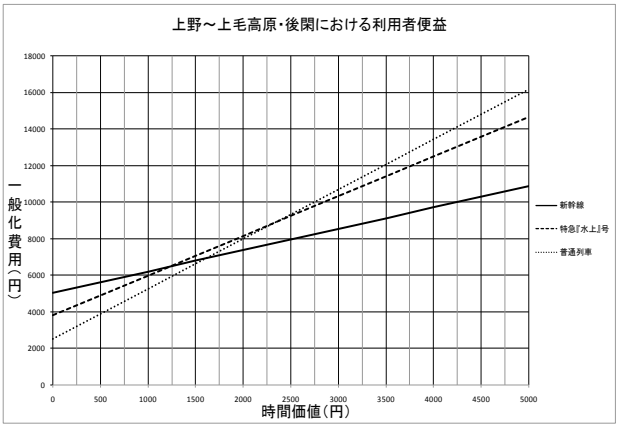

図 12　新幹線，特急『水上』号と普通列車の利用者の時間価値と一般化費用との関連

（全国版コンパス時刻表により作成）

新幹線と在来線特急の運転経路を示した図13によれば，新幹線と在来線特急は同じような経路を運行しており，新宿や池袋方面から後閑駅まで直通の特急列車は1本も運行されていないことがわかる。上野駅から群馬県の草津温泉方面へ向かう特急や，東京駅から木更津・館山方面へ向かう特急，および東京駅から大

原・安房鴨川方面へ向かう特急は，普段は新宿駅を通らないにもかかわらず，休日などの多客期には新宿駅の乗り入れを行っている。後閑駅や水上駅に向かう特急列車も新宿駅の乗り入れを行うことで，乗客の利便性と東京西部からの観光客を引きつけることができる。新幹線と並行して在来線の特急を運行させるのであれば，新宿駅や池袋駅など新幹線の通らない駅を通すことで，在来線の特急列車の利用価値が高まるといえる。既存の貨物線を利用してダイヤを増設できるのが在来線の強みであり，それを活かして多方面からの集客につとめることが地域観光にとって不可欠である。

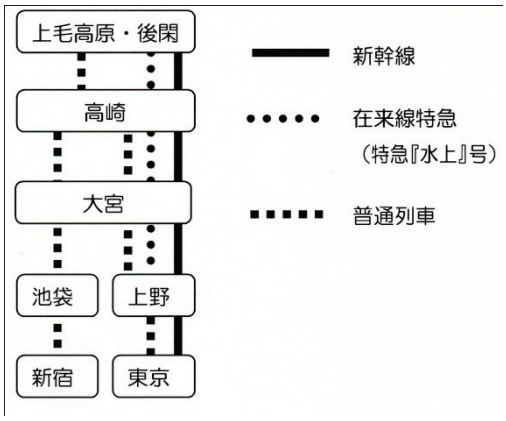

図 13　新幹線，特急『水上』号，普通列車の運転経路図
（全国版コンパス時刻表により作成）

後閑駅までの在来線の特急列車は，新幹線に比べてゆっくり走り，トンネルの数も少ないため，四季折々の景色をゆっくり楽しむことができる。この在来線の特急列車ならではのメリットを活かし，観光客の旅の足として，移動時間そのものを楽しんでもらう工夫が必要である。そのためには，在来線の利用促進につながるようなイベントの開催や企画きっぷの旅行商品開発が必要となる。例えば，JR 東日本が企画する「駅からハイキング」や群馬ディスティネーションキャンペーンに，在来線の特急列車の利用を組み込んだ旅行商品の開発も必要となる。「速く観光地に行きたい」という人には新幹線を，「安く観光地に行きたい」という人には普通列車を，そして「観光地までの移動を快適に楽しみたい」という人には在来線の特急をと，めりはりのある企画戦略が必要であり，そのような戦略の目的地として「たくみの里」が必要である。

4.3　「たくみの里」と関連した地域観光資源

「たくみの里」が立地するみなかみ町の猿ヶ京三国温泉郷には数多くの地域観光資源が分布している（図 14）。宿泊空間として，猿ヶ京三国温泉郷である湯宿・猿ヶ京・法師・川古・赤岩の 5 つの温泉地があり，日帰り温泉としては奥平温泉遊神館とまんてん星の湯がある。レジャー施設としては，ファミリーオ新治・フルーツ公園桃李館・赤沢スキー場・群馬サイクルスポーツセンターなどがある。なかでも，フルーツ公園桃李館は「たくみの里」と近接して立地し，それら 2 つを組み合わせた観光が企画されるなど相互の関連性が強い。フルーツ公園桃李館でもジャム作りやパン作り

図 14　新治ガイドマップ
（みなかみ町ホームページ観光マップより引用）

などの体験が可能であり，「たくみの里」との体験と差別化が図られている。また，フルーツ公園桃李館では果樹のオーナー制度が行われており，2010 年現在で 600 件の登録がある。果樹のオーナー制度は，都市の居住者に果樹のオーナーになってもらい，日常的な維持管理は地元の農家が行うが，収穫体験や収穫物はオーナーの楽しみとするシステムである。都市に居住者は最低でも年に 1 回フルーツ公園を訪ねることになり，観光の発展の可能性が高い。

実際，みなかみ町旧新治村に点在する地域の観光資源を活用し，それらを「たくみの里」と有機的に結びつける計画が必要になる。また，「たくみの里」における地域の観光資源の有機的な結びつきも重要になる。個々の観光資源の魅力で観光客を引きつけるのでなく，いくつかの観光資源をセットして捉え，そのセット全体の総合力で観光客を引きつけることが必要である。観光資源の組み合わせによる総合力は，観光者に地域のストーリー性（物語性）を提供することでもある。「たくみの里」における観光資源として，「たくみの里」事業以前の固有の資源であった野仏はストーリー性を観光客に提供するうえで重要な役割を担っている。の仏巡りコースの農村景観に点在する「たくみの家」，野仏巡りの終点である県指定重要文化財の泰寧寺，および県重要文化財の旧大庄屋役宅書院，そして歴史国道に指定された旧三国街道須川宿などの観光資源を有機的に組み合わせることで（図 2），地域のストーリーは地域のホスピタリティとともに有意に構築できる。その際，観光資源の有機的な関連の中核として，宿泊施設が重要になるが，「たくみの里」は現状として宿泊と結びついた観光になっていない。

「たくみの里」に最も近接して立地する温泉地は湯宿温泉である。湯宿温泉は約 1200 年前に開湯されたといわれ，開湯当時から農閑期や療養の湯治場として栄えてきた。湯宿温泉には，地域住民に開放されている共同浴場が 4 か所に立地しており，地域住民はもちろんのこと観光客の利用も少なくない（4 つの共同浴場のうち 1 つは地域住民専用であり，観光客に開放されているのは窪湯・竹の湯・小滝の湯の 3 つである）。湯宿温泉は利根川支流の赤谷川の谷底低地に立地し，「たくみの里」はその低地から連続する上位段丘面上にある。湯宿温泉と「たくみの里」は近接しているが，比高約 90m の地形的な障害は 2 つの観光地の結びつきの障害にもなっている。2 つの観光地の直線距離は約 500 m で，徒歩にして 10 分弱の時間距離にある。しかし，段丘崖の葛籠折りの坂道を上り下りすると，歩く距離は約 1.5km で，時間距離も 30 分以上になる。また，2

図 15　たくみの里ガイドマップ
（新治農村公園開発公社資料より引用）

つの観光地を結ぶ路線バスがあり，所要時間は 5 分弱である。しかし，バスの運行便数は 1 日 12 便（6 往復）であり（1 時間に 1 便程度），湯宿温泉と「たくみの里」を結ぶアクセスは必ずしも良くない。

写真 13　みなかみ町湯宿温泉の窪湯前通りの景観

（2010 年 7 月撮影）

湯宿温泉の旅館経営者の聞き取り調査によれば，「たくみの里」がつくられた当初，観光客が増えたことは事実であるが，そのような観光客が湯宿温泉の利用につながっていないことが大きな問題であるという。また，湯宿温泉の良い点である鄙びた温泉街を維持することと（図 1），観光客を増やすことをどのように調和するかが今後の課題だともいっていた。つまり，湯宿温泉と「たくみの里」の連携とともに，湯宿温泉らしさをどのように維持するかが重要となっている。湯宿温泉は湯治客を増やすために，湯宿温泉内で使える湯めぐり手形や，みなかみ町国民保養温泉地の川古温泉と法師温泉，および上牧・奈女沢温泉と共同した湯めぐり手形（図 2）を発行するなどしており，みなかみ町の温泉旅館や温泉地間の結びつきは強いものになっている。これらの温泉地は道路交通によって容易に結びつくことができ，湯めぐりの相乗効果で温泉地の活性化を図ろうとしている。その反面，どの温泉地も「たくみの里」との連携は弱く，温泉と「たくみの里」を組み合わせた観光商品の開発は進んでいない。このような状況は，温泉地と「たくみの里」の地理的位置（低地と段丘面）による隔絶性に起因しており，そのような隔絶性を解消する工夫が必要である。心理的な隔絶性は「たくみの里」の鈴の家の職人が描いた絵が湯めぐり手形に使われるなど改善されてきている。物理的な隔絶性も道路網の整備やバス路線の増設などで改善しなければならない。

写真 14　みなかみ町における「湯めぐり手形」

（2010 年 7 月撮影）

Ⅴ．まとめ

本報告は，「たくみの里」の建設から四半世紀を経た 2010 年現在の状況を現地調査によって実証的に明らかにし，「たくみの里」が地域観光に果たす役割と課題について検討することを目的とした。「たくみの里」の来訪者は，2010 年現在で年間約 45 万人を数え，その観光振興は地域住民主体の内発的なものとして成功した試みであったことに間違いない。成功した要因は多く挙げることができるが，最も大きな要因は内発的な観光振興にこだわったことである。内発的な観光振興は地域住民のノウハウやアイディアを用いて地域資源を有効に活用することであり，そのための社会組織が構築されることである。いわば，「たくみの里」は地域住民のアイディアと地域資源の活用，そしてそれらを持続させるための社会組織の結びつきによって建設され発展してきたといえる。

実際，「たくみの里」は，従来までの観光振興の常道であった「ハコモノ観光」とは一線を画しており，地域資源の再発見と活用を主体とした「体験・交流型観光」の典型的な事例になっている。したがって，「たくみの里」は大手ディベロッパーによるリゾート開発が行われず，地域観光は地元住民による地域の潜在的な資源を活用した野仏めぐりから始まった。これと農村散策を組み合わせた観光は，年間約 4 万人の来訪者を集めた。しかし，「トイレや休憩施設がない」といった観光客の苦情や，「農作業をしている場で突然観光客に話しかけられた」とか，「農道に乗用車が入ってきた」，あるいは「心ない人が山野草を持ち去る」といった地域住民側の苦情もあり，観光客と地元住民の苦情や要望をどのように調整するかという問題が生じた。そのような問題を解決する方策の 1 つとして，「たくみの里」

が観光と地元住民の生活の両立を基本的理念に建設された。そのことが,「たくみの里」が大手ディベロッパーの観光開発と一線を画す要因にもなっている。

「たくみの里」は25軒の「たくみの家」と地元住民が主体となって運営されている。観光と農村生活の両立では，農村景観を保全し，保全した農村景観とそこで展開する生活文化や手づくり体験を資源として観光客を呼び込む工夫が行われている。それは,「たくみの家」を地域全体に分散させることや「たくみの家」の存在形態の多様性を保つこと，および「たくみの家」が地域住民と協力して花壇整備や清掃などを行い農村景観の美化に努めていることに反映されている。しかし,「たくみの里」は観光振興の側面で成功したが，地域振興の側面での成果は今後の課題として残されている。ここでいう地域振興は，地域が経済的に潤うことはもちろんのこと，地域に雇用が生じて人口流出が抑制され，地域住民の生きがいに満ちた社会が構築されることである。また，そのような地域が点として存在するのでなく，1 つの点として生じた地域振興が周辺地域に波及し，面的な地域振興が生じることが理想的である。

「たくみの里」は点としての観光地としての，そして「たくみの里」の構成要素である「たくみの家」も点としての観光拠点としての役割は果たしている。しかし，点としての観光拠点をどのように結びつけるかは必ずしも十分とはいえなかった。具体的には,「たくみの家」の分散した立地は来訪者の動線に地域的差異を生み出し,「たくみの家」の分散立地の理念が有名無実化して観光資源の有機的連携も薄れている。このような課題に対して,「たくみの里」は回遊バスの運行などで対処してきたが，地域における地域資源の有機的連携は今後も模索すべき課題でもある。さらに,「たくみの里」は周辺との観光地の連携が少なく，点的な観光地としての性格を強くしている。周辺の観光地との連携を強め，面的な観光地として「たくみの里」を性格づけるような仕掛けが必要である。例えば，水上地域の観光地の機能分担を明確にし，それぞれの機能を組み合わせた観光メニューを用意することも仕掛けの1 つである。このような仕掛けにおいて,「たくみの里」はさまざまな観光地を結びつける繋ぎ手の役割を担うこともできる。そして，さまざまな観光地の繋ぎ手としての「たくみの里」は観光動線の結節点となるため，リピーターの確保も十分に可能となる。

謝辞

本報告は，首都大学東京都市環境学部自然・文化ツーリズムコースにおける 2010 年度の地域環境学野外実習の調査レポートを加筆・修正したものである。調査に際して，財団法人新治農村公園公社常務理事の神保　進氏とたくみの里運営協議会会長の河合 進氏，および「たくみの家」の皆様をはじめとする「たくみの里」の地域住民の皆様にお世話になった。記して感謝いたします。

2010 年における地域環境学野外実習参加者

参考文献

青木 繁・藤本信義 1991. 地域管理による都市・農村交流施設の計画手法. 日本建築学会学術講演梗概集: 991-992.

新井直樹 2005. 地域づくり型観光政策のあり方に関する一考察　ー群馬県新治村の「たくみの里」とコミュニティビジネスを事例としてー. 地域政策研究 8(1): 55-68.

有末武夫　1993. 「群馬県の地誌」. 前橋: 地域科学研究所.

伊藤修一郎 2003. コモンズのルールとしての景観条例.日本政治学会年報政治学 2003: 229-244.

大宮 登・新井直樹 2003. 群馬県の市町村合併と小さな自治の取り組み. 月刊自治研 45: 13-22.

木野勢雄也・小柳 健・岡崎篤行 2004. 伝統的様式を規範とした継承型住宅の形成と普及. 日本建築学会北陸支部研究報告集 47: 340-341.

黒岩麗子・藤本信義・三橋伸夫・青木 繁・本庄宏行 1997. 都市農村交流の拡大に伴う生活環境の変化と課題. 日本建築学会学術講演梗概集: 433-434.

国土交通省編 2009.「地域いきいき観光まちづくり 2009」.

河合 進 2001. 内発的な農村知己発展の実践と課題. 農村計画学会誌 20(2): 126-128.

栗原愛明 1990. 自治と共生の里おこし（熾し）運動によるむらづくり. 農村計画学会誌 9(3): 41-47.

群馬県企画部統計課 2010. 群馬県統計情報提供システム. http://toukei.pref.gunma.jp/ (accessed: 2010.10.28)

嵯峨創平 1994. 群馬県新治村にみる地域経営. 地域開発 355: 52-57.
徐 鳳浩 2006. 内発的発展論を通して住民参加による村づくり. 地域政策研究 8(4): 105-110.
鈴木和雄 1999. 文化・人・景観を活かした農村活性化への挑戦. 地方公務員研究 58: 28-34.
千賀裕太郎 2001. 新治村における内発的発展の評価と課題. 農村計画学会誌 20(2): 132-135.
中島正裕・千賀裕太郎・斎藤雪彦 2001. 都市農村交流に対する住民の評価に関する研究. 農村計画論文集 3: 25-30.
原澤達也 1994. 群馬県新治村景観形成の取り組みについて. 都市計画 253: 36-38.
溝尾良隆 1996. 群馬県新治村におけるリゾート開発計画とリゾート地域の形成過程. 経済地理学年報 42(3): 18-32.
溝尾良隆 2007.「観光まちづくり　現場からの報告」. 原書房.
吉田春生 2010.「新しい観光の時代　観光政策・温泉・ニューツーリズム幻想」.原書房.

投稿：2010 年 11 月 8 日）
（受理：2011 年 1 月 21 日）